

博士論文要旨

技術連携に関する探索的研究

－ 個人と組織、戦略の視点からの分析 －

立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント研究科
テクノロジー・マネジメント専攻博士課程後期課程

ふりがな いむ よんじゅ
氏 名 LIM Yeong Joo

イノベーションの重要性が高まっているが、研究開発の効率性は低下している。日本のイノベーション・システムは大手企業の自前主義から外部連携によるネットワーク型に変化し、その中でもシステム全体の鍵となるのは研究開発型の中小企業の役割であるとされている。こうした中で企業の技術連携が新たなイノベーションを創出することが有効な戦略となっているが、従来の技術連携に関する研究は、大手企業に関心が集中し、中小企業の技術連携に関してはデータの制約のためもあって研究の蓄積が乏しい。また、技術連携の分析レベルにおいては、ほとんどが産業、企業レベルでの分析であり、企業を構成する組織、個人に関する研究蓄積は十分とは言い難い。また、日本企業はオープン・イノベーションの流れへの対応が不十分とされ、他国に比べ技術連携に比較的消極的であると言われていることから、他国との国際比較を行うことの有用性があるが、比較研究が乏しい。

こうした問題認識から、本研究では、個人、企業、国という各レベルにおける技術連携の実証研究を行っている。研究者個人レベルの分析の結果、技術連携が個人レベルでの研究の多様性をもたらすことを定量的に明らかにするとともに、そうした多様性をもたらすプロジェクト運営の条件を考察した。次に、企業レベルの研究では、日本の中小企業の技術連携の成果に影響を与えている要因は、戦略的要因としてコア技術レベルが影響を与え、組織的要因としては、研究開発組織体制の専任度合いと教育充実度が技術連携の成果に影響を与えていることが示された。また、日韓比較による国レベルの比較分析からは、韓国は日本に比べて、中小企業の技術連携への参加割合は日本に比べて高いこと、そして、技術連携の成果に影響を与える要因については、韓国では戦略的要因としてはビジョンの浸透度が重視され、組織的要因としては教育充実度が影響することが示された。併せて実施したインタビュー調査による定性分析等から、技術連携のメカニズムについて考察した。